

# 教育超大国インド

世界一の受験戦争が  
世界一の経済成長を作る

松本陽

企画 西岡吉誠

インド  
の強さは  
ベンチャー企業 14万社、  
GDP世界5位  
のインド経済躍進の秘密  
教育にあり!

- ◆優秀な学生は1年目で年収8000万円
- ◆毎週2つ新しい大学が誕生
- ◆成績トップ(トッパー)は医者やプログラマーと並ぶ将来の夢



# 教育超大国インド

世界一の受験戦争が世界一の経済成長を作る

松本陽

企画  
西岡孝誠

星海社

325



SEIKAISHA  
SHINSHO



## はじめに

このたびは、数多くの書籍の中から本書をお手に取っていただき、誠にありがとうございます。インドと日本を行き来しながら、教育系の会社（Studious Education といいます）を経営しております松本と申します。本書ではインドという国について、教育・受験という視点を中心にお話しできればと思っています。

本書のゴールを最初にお伝えすると、読み終えた時に「インドって何だか面白そうな国だな」、そして「日本って、やっぱりいい国だな」と思っていただけのことを願って、この本を書きました。

みなさまは「インド」と聞いて、どのようなイメージを持たれるでしょうか？

私のインドに対する印象を一言で表すと「爆進する国」です。2024年、インドは日本のGDPを追い抜こうとしています。14億人を超える人口を抱え、毎週のように新しい

大学ができ、毎月のようにユニコーン企業が誕生する——そんな「爆進」と言うほかない勢いで成長を続ける国がインドです。

本書は、そんなインドという国に関わった私の経験から見えてきたインドの姿をお届けするものです。できる限り、私が実際に見聞きし、体験したことを正直に描くことを心がけました。インドのポジティブな側面だけでなく、インドという国の複雑な現実、一言では語れない困難な課題にも触れられる限り触れながらインドの持つダイナミズムを描くとともに、そこから私が生まれ育った日本という国を改めて私個人の独断と偏見で捉え直す、その考察の試みでもあります。

ここで、本書を執筆するに至った背景について少しお話しさせていただきます。私がインドで事業を始め、インドの首都デリーに移住した当初、よく耳にした言葉があります。

「え、インド？ 住めるんですか？」

幾度となく言われた言葉です。それくらい、多くの日本人にとって、インドという国は遠い存在なのではないかと思われました。他方、私が見てきた2020年代のインドの

発展や、インドにおける教育・受験の話をする、非常に驚かれることも多々ありました。つまり、インドという国や、インドの教育・受験事情に対して多くの日本人が持っている先入観やイメージと、2020年代の今現実にはインドで起きていることのギャップが、あまりにも大きいのです。そして、ほぼ間違いなく次の言葉はこのようなものでした。

「いいなあ……インドは未来がありますね。日本はもうダメですもんね」

しかし、私はそうした言葉に、大変生意気ながらどこか違和感がありました。なぜかという、私はインドで生活する中で、そしてインドの教育事業を推進する中で、日本の良さ、そして日本の教育の素晴らしさを実感することが、どんどん増えてきたからです。

私は学生時代から社会人以降も含めて、一貫して教育領域に携わ<sup>たす</sup>ってきました。京都府の公立小学校で教員を務める両親の息子として生まれた私は、小中高そして大学と日本で育ち日本の教育を受け、2012年、大学4年生のころに、ご縁があり株式会社リクルートが運営する「スタディサプリ」(当時のサービス名は「受験サプリ」というオンライン学習サービスの黎明期にアルバイトとして関わる機会をいただきました。大学卒業後はその

まま社員としてリクルートに入社し、以降スタディサプリの新規事業開発や海外展開といったお仕事に従事し、7年半ほど勤めた後、退職・渡英し、1年間ロンドン大学（ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン）の教育学研究所という、QS世界大学ランキングにて、教育学領域で9年連続世界1位の研究機関でエドテック（EdTech = Education and Technology の略、日本語では教育工学とも言われます）の修士課程に通いました。修士課程を無事に修了した2020年から2024年3月末まで教育大手のベネッセホールディングスに在籍し、その中でインド事業を起案・事業化し、現地法人を設立して取締役としてデリーに駐在してきました。現在は、自身で教育系の会社をインドで興してトライアルをしながら、某外資系IT企業にて教育DXを推進するお仕事をさせていただいています。

このように、一貫して教育領域に身をおく中で、日本のみならず比較的さまざまな国で暮らす機会をいただきました。その中で、昨今の「日本はオワコンだ」という風潮に対して、部分的には理解しつつも、でもやはり「日本っていい国だよね」「日本の教育ってすばらしいよね」とも強く感じています。

「インドについての本を書きませんか？」と、本書の企画者である西岡壺誠さんから声をかけていただいた時、単に「インドのこんなところがすごいんだ」と、インド経済・教育



の発展している面だけにフォーカスするのではなく、インドを知った結果見えてきた日本の良さや、そして日本のすばらしさについてもしっかりと伝えたいと、日本に生まれ、そして育った者として思っています。

本書は、インドの多面的な姿を、できる限り等身大で描こうと試みたものです。第1章では私が実際に体験したインドの姿を、第2章ではインドの経済発展とその特徴を、第3章ではその背景にある教育システムとその課題を、そして第4章では日本とインドの比較を通じて見えてきた中の私なりの示唆を、それぞれ見ていきます。

ただし、一つ重要な注意点があります。本書で描かれるインドは、あくまでも私が体験した「限定的なインド」に過ぎません。22の公用語と数百の方言が存在し、様々な宗教や民族が共存する極めて多様な国を、一口に「インド」と広く語るのはかなり無理があると私は考えています。同じインドという国に暮らしている日本人同士でも、各々が向き合っている産業や地域などによって文字通り千差万別の、様々な表情が見えてくる国であり、本当に同じ国で暮らしているのだろうかと思わずにはいられないくらい、その見えている景色は多様なのです。

その意味で、私が主に関わっているのは、「主に北インド（デリーやその周辺）」の「都市部」の「教育産業」という限られた領域であり、繰り返しですがインドのごく一部に過ぎません。本書ではそれを、あくまで便宜的に「インド」と表記していますが、インド全体を語ることができているわけでは決してないですし、他の書籍やメディアでインドについて語られている内容を否定するものでも全くございません。そんな、何度でも味わい深い、そして奥深いインドという国で私が目の当たりにしている生々しい世界に、お連れさせていただければと思います（あくまで私が見た限りの、インドのごく一部ですが）。

私は、インドと接点を持つ中で、インドという国も、そして日本という国も、ありていな表現ですがとても好きになりました。それは私にとってとても嬉しい喜びであり、これを読んでいただいたみなさまにおかれましても、少しでもこの両国をこれまでより少しでも身近に感じていただければ著者として本望です。

今、世界は大きな転換点を迎えています。人口減少と経済の停滞に直面する日本、そして猛烈な勢いで発展を続けるインド。この二つの国は、まるで対照的な姿を見せているかのようですが、互いに学び合えるものが必ずあるはずですよ。本書が、そのような気づきを引きつけとなれば幸いです。

目次

はじめに 3

第1章 想像と全く違っていたインド初体験

13

毎週新しい大学ができるほどの教育熱 18

トップ大学を出れば1年目の年収8000万円 24

今やどの国も無視できない超大国インド 30

宗教・言語・カーストなどに見るインドの多様性 34

とにかくよく喋るインド人 38

ノーと言わないインド人、インド人におけるイエス／ノーの意味 41

「富豪」のレベルが本当に桁違い 46

インド展開を目指す日本企業 52

インドはスタートアップ大国 60

世界のリーダーは徐々にインド人に 70

ジュガール精神とは何か 76

ごった煮のデリー 79

IT界の中枢バンガロール 84

カーストについて 93

第3章 インドの教育——世界最大の受験競争が生む光と影 97

不正が横行するほどのインドの受験戦争 98

受験は人生を変える手段<sup>101</sup>

名門大学を出れば1年目で年収8000万円も夢ではない、しかしほとんどの大学は……

格差をなくすためのインドの教育改革<sup>110</sup>

理数系教育とビジネス教育を融合させたインドの基礎教育 112

数学に見るインドと日本の教育の違い 119

予備校の街コタと「ダミースクール」 123

ダミースクールが流行する理由<sup>126</sup>

受験戦争の中でインドの子どもが目指すもの 129

受験の闇「セブナイヤーズ・トラウマ」 134

今のインドは高度経済成長期の日本 139

# インドから見えてくる日本の未来

松本陽×西岡孝誠

インドから見た日本は「いい国」 147

日本の教材はインドで高評価 153

トッパーの実態 159

インドの教育は平等ではない 164

インドの超トップ層は国外に行く 169

日本がインドから学ぶべきこと 173

受験体験がスタートアップへの挑戦につながる 178

「普通」「当たり前」がないインド 181

おわりに 185

第1章

想像と全く違っていたインド初体験

私がインドと最初に接点を持ったのは、2020年の10月でした。

これはつまり私がベネッセに中途入社したタイミングなのですが、当時ベネッセでは決算発表なども含めて「国内だけではなく、海外に打って出ていかねば」という発信もあり、そのもとで海外展開を検討するプロジェクトに参画することになり、その検討国の一つがインドでした。

当初は新型コロナウイルスのパンデミック真ただ中で、日本とインドを気軽に行き来することができず、基本的にはフルリモートで、インド現地でのパートナーとなりうる人物を見つけ、インドの学校さんに対してベネッセはどのような支援ができるのか、検討していました。そんな中、約半年後の2021年3月頃、ようやく新型コロナウイルスの状況が少し落ち着きを見せ、そしてトライアルをリモートベースで重ねる中で、仮説として見えてきた事業モデルをより具体化していこうということになり、「いつまでもフルリモートをやっているかもしれない。まずは出張ベースでもいいからインドで仕事をしよう」と、この仕事で初めてインドに行くことになりました。

日本から約10時間近くかけて、初めてデリー国際空港に降り立った日のことです。空港からホテルのある「エアロシティ」地域に向かうタクシーの中で、「あれ……？」と思いま



した。エアロシティは、ホテルやオフィス、そして一部のモールやレストランしかない、「街」というよりは「区画」に近い地域ですが、車窓からの景色に「インド、めっちゃくちゃ綺麗じゃん？」と思わずにはいられませんでした。

コンビニはある（「24Seven」というお店です。日本人が聞くと思わずクスツと笑ってしまう名称ではないでしょうか）、地面は整備されていてとても歩きやすい、総合商社も含めて日系企業がたくさん入っているビルもある、日本食レストランもあり、味もとても美味しい。お酒も飲めるし、それに種類もたくさんある。EV（電気自動車）のチャージスポットも、日本の比ではないくらい至る所に設置されており、走っている車は主に日本車と外車、そしてその3分の1くらいが電気自動車。「俺はもしかして、シンガポールかどこかに間違っって降り立ってしまったのではないか」——そう思わずにはいられない第一印象でした。

元々聞いていたインドは「街中を牛が歩いている」「渋滞がひどすぎる」「シャワーからでる水で風邪を引く」などなど、どこまで本当なのかと思わずにはいられない、想像を絶するような環境で、そうした状況を覚悟した上でインド



エアロシティの様子

に降り立ちました。しかし、私がインドで受けた第一印象は、その真逆だったわけです。

もつとも、エアロシテイという場所は、インドの中でもかなり例外的な場所であると後ほど知りました。その後、インドの様々な街を巡る中で、例えばオールドデリーのような想像通りの昔ながらのインドらしい街並みや風景が広がっている場所もあれば、エアロシテイとはまた違った観点での「想像と真逆のインドの都市」も多数見つけるようになります。特に、デリーの隣街であるグルガオン（公称グルグラム）の高層ビルが立ち並ぶ様子や、バンガロール（公称ベンガルール）を中心とした南インドのIT都市・スタートアップ施設などに足を運ぶ中で、想像を絶するほどに発展した、すばらしい施設が立ち並ぶ場所や、まさに今建設中の最新施設がたくさんあることに驚愕させられたのです。

そしてもう一つ、インドに着いて最初に驚愕したことが大気汚染でした。特に北インドにおいて深刻な問題ですが、とにかく大気汚染がひどいです。冗談ではなく、本当に「空が見えない」のです。

どのくらいひどいかというと、例えばデリーなどの北インドの都市で1日暮らすことは、1日にタバコを50本から60本吸うのと同じくらい肺にダメージを与えるとの研究結果が公表されています。街を歩いているだけで胸の中が痒い気がしてきますし、実際車を運転し

ていても、時期によっては前が見えないくらいひどいです。私は2024年を以てベネッセを退職し、現在は日本とインドを往復する形で、インドにいる頻度はこれまでより少し低めにはなっているのですが、今でも咳がとまりません……。

これは言葉だけで説明しても信じてもらえないかもしれない話なのですが（冒頭からそんな話ばかりで恐縮ですが……）、デリーで私が見た信じられない光景の一つは、「トラックの運転席の前（外側）に人が乗っていて、その人の道案内に従って運転する」というものでした。大気汚染がひどすぎて運転席からだとなが見えず、人間が人力で方向確認し、運転手を案内していることもあるのです。しかし、デリーに住む人たちにとっては、大気汚染がひどい時期にはよくある光景なのだそうです。

ふと、「どれくらい大気が汚染されているんだろう？」と気になった私は、大気汚染のグローバルな指数「AQI」を測っているアプリを開いてみました。エリアにもよりますが、日本はだいたい平均30未満で安定しており、人口1億人以上の国としては、国際的に見ても相当に空気が綺麗な国と言えます。一般的に「空気が悪い」と言われるのは指数が80〜100くらいで、それを超えると危険だと言われています。

さて、デリーはどれくらいだったと思いますか？

正解は、1000以上です。

秋・冬には1300くらいあった時もあります。

WHOの基準値の「100倍」です。インドを訪れたことのない方にはなかなか信じてもらえない話なので、スクショもお見せしましょう。

アイコンがガスマスクをしていますね……。

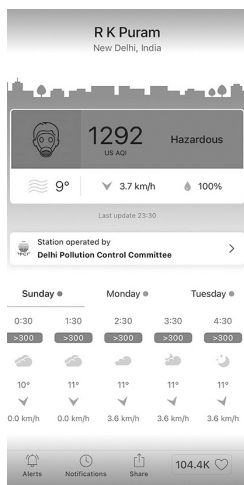
「なんだ、この国は？ 一体どうなっているんだ？」

というのが、私がインドに降り立ってまず感じた、素直な感想でした。

### 毎週新しい大学ができるほどの教育熱

さて、圧倒されるだけでは仕事になりませんから、私はインドの教育や学校を調べるところにしました。まずはホテルでインドの新聞に目を通してみます。一見すると新聞の内容は日本と大きな差がないように感じられたのですが、その中でふと、気になるニュースがありました。

「新しい大学ができました！」



インド・デリーの大気汚染を示すアプリ画面

なるほど、インドは人口が多く、大学受験をする生徒の数もどんどん増えているだろう。大学も不足しているから、新しく大学ができているんだな、と納得したのですが、しかし次の日の新聞を見て、私は衝撃を受けます。

「新しい大学ができました！」

ん、昨日も読んだぞ？ と思い、ホテルの人に頼んで前の週の新聞を見せてもらおうと、やはり「新しい大学ができました！」というニュースが書いてありました。その前の週も同じです。

要するに、インドでは毎週毎週、新しい大学ができていくのです。かつ、その規模も、小規模大学のそれではなく、**生徒1万人規模の大学が、毎週2つずつくらい**の頻度で、**次々と作られています**。それなのに別の記事では、大学が増え続けているそのトレンドに対して、**多すぎる・速すぎる**のではなく、むしろ逆に「今のペースのままでは大学の数が足りず、インド政府が問題視している」と書かれており、目を疑うばかりでした。第3章で改めて書きますが、インドでは2020年から、NEP2020という大規模な教育改革が走っています。その目標の一つに「大学の民主化」があり、現在26%ほどの大学進学率が50%にする、それと関連して、大学を含めて高等教育機関の数を今の倍以上の13万にする、

というプロジェクトです。日本では少子化が進み、大学の統廃合や募集停止のニュースが頻繁に聞こえるようになってきましたが、その一方で、インドでは真逆と言って差し支えない状況が起きている。日本人の私としては「インドの今って、こんな状態なのか……すごいな……」と戦慄せんりつしたのを覚えています。

では学校はどうなっているのでしょうか。ベネッセインディアは今も事業運営をしているので、本書ではその提供サービスにあまり具体的には触れませんが、会社のホームページの内容を中心に言える範囲でお伝えすると、主にインドの学校支援サービスをお届けする事業を運営しており、私もインドの学校に足を運ぶことがよくありました。私が最初に訪れたのはデリー首都圏の私立学校の一つで、首都圏の中でもお金に余裕がある親御さんが多く、アップパーミドルからアップパー層の家庭の子が中心の学校で、学力的にはトップ10%くらいの学校でした。

訪れてまず率直に思ったのは、「日本と全然変わらない、っていうか日本よりも環境がいんじゃないか」ということでした。机も日本の学校と同じようなもので、教室の後ろや廊下には至る所に、偉人の格言・名言が綺麗に印刷されたポスターが貼られていました。そして当たり前のように、パソコンルームには最新のマックブックが一人一台ずつ置かれ

てあり、さらには理科室のような場所には、STEAM教育用かと思われる、様々なロボット系の器具が所狭しと置かれているなど、設備的には日本よりも揃っているのではないかと感じました。

その上で、生徒さんを観察していて驚かされたのは、「基本的には休み時間もずっと勉強している」ということでした。みんな非常に勤勉で、休み時間だろうと関係なくずっと机に向かっていている生徒が半分以上でした。もちろん日本にもそういう学校があるとは思いますが、それにしても頑張っているな、と感じました。クォーター（四半期）ごとの学力テストでクラスが分けられるうえで、そこで上位と下位が分かれてしまうので頑張っているのだとか（インドのすべての学校がそうなのではなく、都市部を中心としたアップERMドル層以上の私立の場合と私は理解しています）。初めてインドの学校を訪れた感想としては、月並みな感想ですが「日本だけでなく、インドにおいても、勉強・受験ってすごく大事なんだな」というものでした。

これだけなら「まあ、日本でもこういう学校はあるもんな」という



インドの学校で学ぶ生徒たち

話で終わるかもしれませんが。しかし、学校から出た時、街中であるものを見つけました。

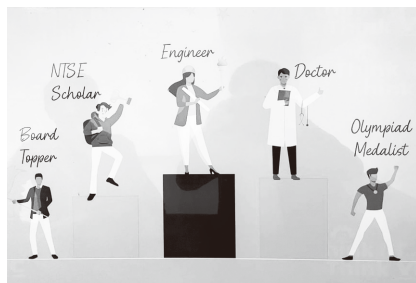
それは一枚のポスターでした。若者の顔が大きく写されているポスターで、遠くから見ると選挙ポスターと見分けが付きません。でもそれは、とある大学の合格者のポスターだったのです。その大学とはインドのトップ大学であるインド工科大学 (इ.ए.ए.टी. Indian Institute of Technology, IIT) です。いわば日本で言う東京大学のような大学です。その大学の合格者たちのポスターが並べられていたのです。現地の人に「なんでこんなものが飾られているの?」と聞くと、こんなふうに答えられました。「これはね、この街の誇りなんだよ。これだけの若者がこの街から合格した、という誇りなんだよ」と。つまりは、日本で言うところの大谷翔平さんや藤井聡太さんのような扱いです。それだけ、大学受験に対する比重は重いのです。

インドの学習塾に足を運んだ際にも、大学受験に対する比重の重さを感じさせられました。空気感が違うし、気迫が違う。ただ勉強しているだけでなく、10代の子が本気で、「人生を賭けて」勉強しているのです。ひたすら勉強で、それ以外のことは目もくれない、そんな文字通り、鬼気迫る様子で勉強している姿を、目の当たりにしたのです。

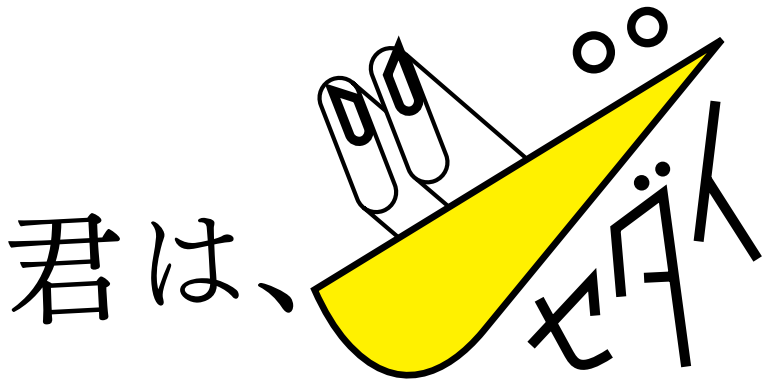
貼ってあるポスターも印象的でした。「人気職業ランキング」が壁に掲示されていたので



すが、その序列は①エンジニア②医者③大学の先生④オリンピックメダリスト⑤トッパーといった具合です。メダリストよりも、エンジニアや医者・大学の先生が上なのです。中でもエンジニアと医者の人気は圧倒的です（理系が強いインドにおいて、弁護士や経営コンサルタントなど、いわゆる文系の職業は一切入っていません）。ちなみに⑤のトッパー（Topper）とは、インドにおいて日本の「大学入学共通テスト」のような位置付けの試験である Class 10 Board Exam および Class 12 Board Exam において満点をとった生徒のことです。日本では考えられませんが、その共通テストで満点もしくは限りなく満点に近い点数をとると、新聞にその生徒の名前と点数、所属する学校や塾の名前が掲載されます。個人情報是一体どうなっているんだ、と思わずにはいられませんが、トッパーはさながらオリンピックのメダリストと同格のような扱いを受けていて、若者たちやその保護者にとっては強烈な憧れの存在なのです。



人気職業ランキングにはトッパーが入っている



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**